

源氏物語評釈

第七卷

若菜 上
若菜 下

玉上琢彌

角川書店

源氏物語評釈 第七巻
全十四巻



昭和四十一年十一月三十日 初版発行
昭和四十八年六月三十日 四版発行

著者

玉 上 琢 彌

発行者

角 川 源 義

印刷者

村 沢 達 弘

製本者

鈴 木 俊 一

発行所

株式会社 角 川 書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話東京 (265) 七二二 (大代表)

© T. Tamagami 1966

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

旭印刷・鈴木製本

3393-560507-0946(1)

目次

凡例

若菜上

一 朱雀院病氣、出家を志す

朱雀院のみかど、ありしみゆきののち、そのころほひより

二 朱雀院の女御子

御子たちは東宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ

三 東宮と母女御、お見舞

東宮は、かゝる御悩みに添へて、世をそむかせたまふべき

四 朱雀院病状悪化

あきゆふにこの御事を思し嘆く、年暮れゆくまゝに

五 夕霧の見舞、朱雀院とやりとり

中納言の君参りたまへるを、御簾のうちに召し入れて

六 女房と朱雀院と、源氏父子評

女房などは、のぞきて見きこえて、いとありがたくも見えたまふ

七 女三の宮の婿選び

姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御有様

八 乳母は源氏をすすめる

中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに

二五

一九

三三

二五

二九

三三

二九

四三

四四

九 乳母、左中弁に相談

この御後見どもの中に、重々しき御乳母の兄

十 朱雀院、女三の宮の将来を心配

しか思ひたどるによりなむ、御子たちの世づきたる有様

十一 朱雀院、婿の候補者を批評

今少しものをも思ひ知りたまふほどまで、見過ぐさむとこそ

十二 候補者たちのがわから

太政大臣も、この衛門の督の、今まで一人のみありて

十三 東宮、源氏を推薦

東宮にも、かゝる事ども聞しめして、さしあたりたる只今のこと

十四 左中弁、源氏を説く

この宮の御事、かく思しわづらふさまは、さきさきも

十五 朱雀院の柏殿で女三の宮の裳着の式

年も暮れぬ、朱雀院には、御こゝちなはおこたる様にも

十六 秋好む中宮の贈り物

中宮よりも、御装束、櫛の箱、心ことに調ぜさせたまひて

十七 朱雀院の剃髪と臘月夜

御こゝちいと苦しきを念じつつ、思しおこして、この御いそぎ

十八 源氏、朱雀院を見舞う

内よりはじめてまつりて、御とぶらひのしげさ、いとさらなり

十九 朱雀院、源氏に女三の宮を依頼

院も物心細く思さるゝに、え心強からず、うちしほたれたまひ

二十 朱雀院の饗宴

夜に入りぬれば、主人の院方も、客人の上達部たちも

二十一 源氏、紫の上を思う

六条の院は、なま心苦しう、さまゝ思し乱る

四六

四七

四八

四九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五六

五七

五八

二十二 源氏、紫の上に女三の宮のことを語る 八七

またの日、雪うち降り空の気色ものあはれに、過ぎにし方

二十三 紫の上の心準備 六〇

心の中にも、かく空より出で来にたるやうなることにて

二十四 新年と六条の院 九一

年もかへりぬ、朱雀院には、姫宮、六条の院にうつろひ

二十五 玉鬘、若菜を奉る 九三

正月廿三日子の日なるに、左の大將殿の北の方、若菜参り

二十六 女三の宮の六条の院降嫁 一〇五

かくて二月の十よ日に、朱雀院の姫みや、六条の院へ渡りたまふ

二十七 紫の上の悩み 一〇九

三日がほどは、夜がれなく渡りたまふを、年ごろさもならひ

二十八 源氏、早朝に帰る 一二七

わざとつらしことにはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふ

二十九 女三の宮に消息 一二三

よろづいにしへの事を思ひでつゝ、とけがたき御けしき

三十 源氏と女三の宮方と、相互に批判 一二五

今日は、宮の御かたに昼渡りたまふ、心ことにうちけさうじ

三十一 朱雀院入山、源氏と紫の上に消息 一二九

院の帝は、月のうちに御寺にうつろひたまひぬ、この院に

三十二 朧月夜退出 一二三

今はとて、女御更衣たちなど、おのがじゝ別れたまふ

三十三 源氏、朧月夜にあう 一二三

六条のおとどは、あはれにあかずのみ思してやみにし

三十四 源氏、紫の上に語る 一二七

いみじく忍び入りたまへる、おはん寝くたれのさま

三十五

明石の女御退出

桐壺の御方は、うちはへえまかてたまはず、御いとまの

三十六

紫の上、女三の宮に對面を望む

對の上こなたに渡りて、對面したまふついでに、姫宮にも

三十七

朧月夜と密会

今宵は、いつかたにも御いとまありぬべければ、かのしのび所に

三十八

紫の上、女御と女三の宮に對面

東宮の御方は、実の母君よりも、この御方をば睦まじきものに

三十九

六条の院の新秩序

さてのちは、常に御ふみかよひなとして、をかしきあそび

四十

紫の上、四十の賀を催す

十月に、對の上、院の御賀に、嵯峨野の御堂にて

四十一

二条の院での精進落ち

二十三日を御としみの日にて、この院は、かくすきまなく

四十二

賀の行幸を拝辞

内にも、故宮のおはしまさぬことを、何事にもはえなく

四十三

秋好む中宮、賀に退出

十二月の二十日あまりの程に、中宮まかでさせたまひて

四十四

主上、夕霧に賀をさせる

内には、思しそめてし事どもを無下にやはとて

四十五

太政大臣も列席

今日は仰せごとありて、渡り参りたまへり、院もいと

四十六

花散里と雲居の雁

大将のたと一所おはするを、さうくしく栄なきこゝち

四十七

新年、明石の姫君西北の町に移る

年かへりぬ、桐壺の御方近づきたまひぬるにより

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

四十八 尼君、姫君に近づく 一六〇

かの大尼君も、今はこよなきほけ人にてぞありけむかし
御方と三人語る 一六二

いともあはれにながめておはするに、御方まゐりたまひて

五十 男御子誕生 一六六

三月の十よ日の程に、たひらかに、生まれたまひぬ

五十一 紫と明石と、若宮の世話 一六八

こなたは、隠れの方にて、たゞ気近き程なるに、いかめしき

五十二 内の産養 一六九

六日といふに、例のおとどに、渡りたまひぬ

五十三 源氏の満足 一七〇

おとどの君も、この程の事どもは、例のやうにも事そがせ

五十四 御方と紫と尼と 二〇〇

御方の御こゝろおきての、らうくじくけだかく、おほどかなる

五十五 明石の入道、入山す 二〇二

かの明石にも、かゝる御事つたへ聞きて、さるひじりごゝちにも

五十六 入道の消息 二〇三

この近き年ごろとなりては、京に、事ならで

五十七 入道の尼への手紙と使者の報告 二〇四

尼君にはことにもかゝず、たゞ、この月の十四日

五十八 御方、入道の文を見る 二〇五

御方は、南の御殿におはするを、かゝる御消息なひ

五十九 御方、尼と語る 二〇六

尼君、久しくためらひて、君の御徳には、うれしく

六十 東宮のお召し 二〇八

宮より、とく参りたまふべきよしのみあれば、かく思したる

六十一 御方、入道の文を姫に見せる 二九

対の上などの渡りたまひぬる夕つ方、しめやかなるに

六十二 源氏の冗談口 三三

院は、姫宮の御方におはしけるを、中の御障子より

六十三 源氏、入道の文を見る 三三

ありつる箱も、まどひ隠さむもさまあしければ

六十四 源氏、女御にむかい紫の上をほめる 三九

これはまた具して奉るべきものはべり、今また聞え

六十五 明石の御方の卑下 三三

そこにこそすこし物の心えてものしたまふめるを、いとよし

六十六 明石の反省 三三

さもいとやむごとなき御ころざしのみまさるめるかな

六十七 夕霧の女三の宮観 三三

大将の君は、この姫宮の御事を思ひ及ばぬにしもあらざりし

六十八 柏木と女三の宮 二七

衛門の督の君も、院に常にまゐり、親しくさぶらひ

六十九 三月、寝殿の東面で蹴鞠 三九

三月ばかりの空うらゝかなる日、六条の院に、兵部卿の宮

七十 夕霧と柏木、女三の宮を見る 二四

いとらうある心ばへども見えて、かず多くなり行くに

七十一 東の対の南面にて宴会 二四

おとど御覧じおこせて、上達部の座、いとかるくしや

七十二 夕霧と柏木と同車して語る 二三

大将の君ひとつ車にて、道のほど物語りしたまふ、なほこの頃

七十三 柏木、小侍従に文をやる 二五

督の君は、なほおはいどのの東の対に、ひとりずみにてぞ

七十四 女三の宮、文を見、小侍従、返事をかく

おまへに人しげからぬ程なれば、かの文をもて

若菜下

一 柏木の思ひ

ことわりとは思へども、うれたくも言へるかな、いでや

二 三月末日、六条の院の競射

つごもりの日は、人々あまた参りたまへり、なまものうく

三 柏木の恐れ

みづからもおとを見たてまつるに、気恐しくまばゆく

四 柏木、弘徽殿の女御を訪う

女御の御方にまゐりて、物語りなど聞え紛らはし

五 柏木、東宮を訪ひ、女三の宮の猫を語る

東宮にまゐりたまひて、論なう通ひたまへる所あらむかし

六 柏木、東宮より猫をあずかる

聞し召しおきて、桐壺の御方より伝へて聞えさせたまひければ

七 髭黒のその後

左大将殿の北の方は、大殿の君達よりも、右大将の君をば

八 螢の宮、真木柱と結婚

兵部卿の宮、なほひとところのみおはして、御心につきて

九 冷泉院讓位

はかなくて年月もかさなりて、内の帝御位につかせたまひ

十 院と新院と后たち

六条の院は、おり居たまひぬる冷泉院の、御嗣おはしまさぬを

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

- 十一 六条の院の婦人方
姫宮の御ことは、帝御心とゞめて思ひきこえたまふ 二九四
- 十二 明石の入道の願文
住吉の御願、かつくはたしたまはむとて、東宮の女御 二九七
- 十三 六条の院の住吉詣で
この度はこの心をばあらはしたまはず、たゞ院の御物詣にて 二九八
- 十四 住吉社頭の儀
十月なかの十日なれば、神の斎垣に這ふ葛も色かはりて 三〇三
- 十五 朱雀院と女三の宮のその後
入道の帝は、御おこなひをいみじくしたまひて、内の御事をも 三〇五
- 十六 紫の上たちのその後
対の上、かく年月に添へて、方々にまさりたまふ御おぼえに 三〇六
- 十七 朱雀院、女三の宮と対面を希望
朱雀院の、今はむげに世近くなりぬるこゝちして、もの心細きを 三〇五
- 十八 源氏、女三の宮に琴を教える
宮はもとより、琴の御琴をなむ習ひたまひけるを、いと若くて 三〇九
- 十九 明石の女御と紫の上
女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつりたまはざりければ 三三三
- 二十 源氏、女三の宮に琴を語る
院の御賀、先つおほやけよりせさせたまふ事どもいとこちたきに 三三四
- 二十一 正月十九日、六条の院の女樂
正月二十日ばかりになれば、空もをかしき程に、風ぬるく吹きて 三三七
- 二十二 夕霧を招く
箏の御琴は、ゆるぶとなけれど、なほかく物に合はする折りの調べ 三四二
- 二十三 女樂、絃樂四重奏
御琴どもの調ともとのひはてて、かき合はせたまへるほど 三四六

二十四 源氏、女方を見まわる

月ころもとなき頃なれば、燈籠こなたかなたにかけて

三九

二十五 夕霧の心中

これもかれも、うちとけぬ御けはひどもを聞き見たまふに

三五

二十六 源氏と夕霧と、春を語り和琴を論ずる

夜ふけゆくけはひ冷やかなり、ふしまちの月はつかにさし出でたる

三六

二十七 琵琶の論

げにけしうはあらぬ弟子どもなりかし、琵琶はしも

三七

二十八 琴の論

よろづの事、道々につけて習ひまねば、ざえといふもの

三八

二十九 けちかき御遊び

女御の君は、箏の御琴をば上にゆづりきこえて、寄り臥し

三九

三十 禄を賜わり、退出

この君達のいとうつくしく吹き立てて、せちに心入れたるを

四〇

三十一 夕霧の思い

大將殿は、君達を御車に乗せて、月の澄めるにまかでたまふ

四一

三十二 源氏、紫の上と語る

院は対へ渡りたまひぬ、上は、とまりたまひて、宮に御物語など

四二

三十三 紫の上と婦人を論ず

多くはあらねど、人の有様の、とり／＼に口惜しくはあらぬを

四三

三十四 女三の宮の方にゆく

宮に、いとよく弾き取りたまへりしことのよろこび聞えむ、とて

四四

三十五 紫の上、発病

対には、例の、おはしまさぬ夜は、宵居したまひて、人々に

四五

三十六 紫の上を二条の院に移す

同じさまにて、二月もすぎぬ、言ふ限りなく思ひ嘆きて

四六

三十七 柏木、中納言となり、女二の宮と結婚

まことや、衛門の督は中納言になりにかかし、今の御世には

三十八 柏木、小侍従と語る

なほかの下的心わすられず、小侍従といふ語らひ人は、宮の

三十九 小侍従、柏木をみちびく

いかにく／＼と日々にせめられ困じて、さるべきをりうかゞひつけて

四十 柏木、女三の宮に迫る

宮は何心もなく大殿ごもりにけるを、近く男のけはひのすれば

四十一 柏木の反省

女官の御もとにまうでたまはで、大殿へぞしのびて

四十二 女三の宮の恐れ

かぎりなき女ときこゆれど、すこし世づきたる心ばへまじり

四十三 柏木と女二の宮

かんの君はまして、なか／＼なるこゝちのみまさりて、おきふし

四十四 紫の上たえいる

おととの君は、まれ／＼渡りたまひて、えふとも立ちかへり

四十五 物の怪あらわれる

さりとて物怪のするにこそあらめ、いとかくひたぶるに

四十六 柏木ら、見舞に来る

かくうせたまひにけりといふこと世の中にみちて、御とぶらひ

四十七 紫の上、受戒

かく生き出でたまひての後しも、おそろしく思ひて

四十八 紫の上、少康

五月などは、まして晴れ／＼しからぬ空の気色に、えさわやぎ

四十九 女三の宮病氣、柏木密会

姫宮は、あやしかりしことを、思し嘆きしより、やがて例のさま

三九八

四〇〇

四〇八

四一〇

四一九

四二〇

四三三

四四四

四四六

四四三

四四六

四四六

四四〇

五十 女三を見舞うため紫の上に挨拶 四四一

かく悩みたまふと聞しめしてぞ渡りたまふ、女君はあつく

五十一 女三の宮懷妊 四四四

出でたまふかたざまはものうけれど、うちにも院にも聞しめさむ

五十二 柏木の密書 四四六

かの人も、かく渡りたまへりと聞くに、おほけなく心あやまり

五十三 女三の宮、源氏を止む 四四七

ようさりつ方、二条の院へ渡りたまはむとて、御いとま聞えたまふ

五十四 源氏、柏木の密書を手に入れる 四五〇

まだ朝すゞみの程に渡りたまはむとて、とく起きたまふ

五十五 小侍従、女三の宮を責める 四五三

出でたまひぬれば、人々すこしあかれぬるに、侍従よりて

五十六 源氏の省察 四五四

おとどは、この文のなほあやしく思さるれば、人見ぬ方にて

五十七 源氏、女三を訪わず 四五六

つれなしづくりたまへど、もの思し乱るゝさまのしるければ

五十八 女三の宮と柏木の恐怖 四六二

姫君は、かく渡りたまはぬ日ごろのふるも、人の御つらさに

五十九 源氏の苦惱 四六四

宮はいとらうたげにて、なやみわたりたまふさまの、なほいと

六十 源氏、玉璽を思う 四六六

右の大臣の北の方の、とりたてたる後見もなく、幼くより

六十一 朧月夜出家 四六七

二条の内侍のかんの君をば、なほたえず思ひ出できこえたまへど

六十二 女二の宮、御賀を催す 四七四

かくて、山の帝の御賀ものびて秋とありしを、八月は

- 六十三 女三の宮病惱、朱雀院の手紙
宮も、うちはへて、ものをつましく、いとほしとのみ 四七五
- 六十四 源氏、女三の宮に教訓
いと幼き御心ばへを見おきたまひて、いたくはうしろめたがり 四七九
- 六十五 柏木、六条の院より遠のく
衛門の督をば、何さまの事にも、ゆゑあるべきをりふしには 四八四
- 六十六 御賀の試楽
十二月になりけり、十余日とさだめて、舞どもならし 四八六
- 六十七 柏木、呼ばれて参入
衛門の督を、かゝる事の折りもまじらはせざらむは、いと 四八七
- 六十八 試楽はじまる
今日のかゝるころみの日なれど、御かたゝもの見たまはむ 四九五
- 六十九 童舞に感泣
右の大殿の四郎君、大將殿の三郎君、兵部卿の宮の孫王の 四九七
- 七十 源氏、柏木に皮肉
あるじの院、過ぐるよはひに添へては、酔ひ泣きこそとめがたき 四九九
- 七十 柏木発病
こゝちかき乱りて、たへがたければ、まだ事もはてぬに 五〇〇
- 七十二 柏木、女二の宮と別れ、父邸に移る
事なくて過ぐすべき日は、心のどかにあひなだのみして、いと 五〇一
- 七十三 十二月二十五日、西山の御賀
御賀は二十五日になりけり、かゝる時のやむごとなきかんだちめ 五〇五

さしえ目次

若菜上（中扉） 明融模写本源氏物語若菜上巻頭

雲林院

仁和寺山門

絵入源氏物語

「姫宮の御後見にこれをや」

絵入源氏物語

「つげのをぐしの神さふるまで」

絵入源氏物語

「ふたり同じやうに、振り分け髪」

絵入源氏物語

「やゝ待たせてまつりて、ひきあげたり」

絵入源氏物語

「身をなげむふちもまことのふちならで」

嵯峨野

棲霞寺

阿弥陀堂

清涼寺

樓門・本堂

薬師如来像

（神護寺蔵）

絵入源氏物語

「入綾をはのかに舞ひて」

万歳楽・青海波

（舞楽図）

奈良七犬寺

屏風土代

（小野道風筆）

隆能源氏絵

東屋（一） 春秋の作り絵

年中行事絵巻 第六巻

真言院にて御修法

根本中堂にて修法

（現代の比叡山延暦寺）

過去現在因果経

（京都 上品蓮台寺蔵）

絵入源氏物語

「僧一人童二人なむ」

二七

二

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

年中行事絵巻 第十六卷 けまり

絵入源氏物語 「花の散るををしみもあへぬ気色」

二四八

若菜下（中扉） 明融模写本源氏物語若菜下巻頭

年中行事絵巻 第三卷 殿上の賭弓

二六一

年中行事絵巻 第三卷 競射

二六六

絵入源氏物語 「みな前後の心、駒取りに」

二六九

絵入源氏物語 「祝ひきこゆる御世の末」

三二一

年中行事絵巻 第一卷 「朝觀行幸」

三二八

絵入源氏物語 「院も時々扇うちならして」

三四八

古今集真名序 （関戸本）

三四四

絵入源氏物語 「水のやうに汗もながれて」

四三二

絵入源氏物語 「わが身こそあらぬさま」

四三九

嚴島平家納経 薬王品 蓮の花

四四四

絵入源氏物語 「契りおかむこの世ならでも」

四四四

絵入源氏物語 「顔のいろたがふらむとおぼえて」

四八九

大日如来像 （安祥寺藏）

五〇六